

ベルンハルト・モールバツハ著

井本响二訳

## 『中世の音楽世界』

——テキスト、音、画像による新たな体験——

法政大学出版局 二〇一二年・六刊

A5 四四〇頁 七五〇〇円

本著者モールバツハは長年にわたり、中世から一八世紀までの音楽を紹介するラジオ番組に取り組んできた。その成果の一つが本書である（未邦訳だが他にルネサンスとバロックをそれぞれ扱う巻がある）。本書は一般向けの概説書ではあるが、教会音楽の変遷を発展史的に追うだけのものではなく、社会的な視野のもとに書かれた骨太の作品である。添付CD-ROMによる音源の提供も目を引く（ただしこれには後述のような問題点がある）。

まず本書の構成を概観したい。0章から2章では古楽の概念や現代における中世音楽の受容といった重要かつ基礎的な（しかし音楽史の通史においてはしばしば見過ごされてきた）問題が扱われ、3章で古代・中世の音楽哲学が概括される。そして中世初期の聖歌を扱う4章から中世後期イングランドの音楽に関する20章まで、概ね年代順かつテーマ別に中世音楽の展開が解説される。教会音楽だけでなく、世俗音楽作品や楽器についても十分な紙幅が割かれている。巻末には筆者による推薦CDのリスト、添付CD-ROMの説明および収録楽曲の歌詞の日本語訳、原註、索引が付される。

本書の記述の特徴として、まず、演奏実践と音楽学との双方への目配りが常になされている点が挙げられる。特に1・2章の記述は古楽の演奏・研究における真正性（authenticity）をめぐる近年の議論を踏まえたものといえよう。さらには、音楽活動を宮廷や都市での生活の一部としてとらえた社会的な視点のもと、音楽作品や音楽理論家の著作の背後にあるコンテクストを十分に示している点も特筆すべきである。この点に貢献しているのは、副題が示す通り、歌詞や音楽理論のテキスト、そして画像資料の豊富な利用である。例えばヨハネス・デ・グロケイオの著作を手がかりに一三〇〇年頃のパリの音楽事情に迫る12章は、史料から見えてくる世界を生き生きと読者に提示した好例である。また版後は、楽器演奏や歌のようすを描く写本挿絵や楽譜を中心に、邦語で読むことのできる既刊の諸概説書に比べて多種多様なものが掲載されている。

また本書は前述の通りCD-ROMによる音源の添付を試みているが、これには大きな欠点がある。この音源は訳書では「録音」としか説明されていないが、CD-ROMのデータに含まれる解説の通り生の演奏を録音したのではなくコンピュータで打ち込んだ旋律のデータを出力しただけのものである。したがって、杓子定規な演奏であるだけでなく、歌詞と旋律とが一体となった音楽の姿を確かめることができないという限界がある。

その他の問題として、訳文に文意の把握が難しい箇所や訳語の検討が不十分な例が見られることも惜しまれる。とはいえ、本書は中世ヨーロッパ社会という固有の文脈の中で音楽が育まれてい

く様子を鮮やかに描き出した概説書として、この分野の知識を得たいと願う多くの読者にとって有益であろう。

(武田啓佑)